

校長室だより

日本福祉大学附属高校 2015年3月2日

万人の福祉のために

真実と慈愛と献身を



卒業式 授与式は厳かに、送る会は感動的に

2月21日(土)第55回卒業式が美浜町長、教育長始め美浜・南知多・武豊町の中学の校長先生や理事長、学長など学園関係者のご出席をいただき挙行されました。本校の卒業式は二部形式になっており、一部は卒業証書授与などのセレモニー、二部は生徒会主催の「卒業生を送る会」となっています。一部は吹奏楽部の演奏と拍手で卒業生が入場。卒業証書授与・校長式辞に続き、卒業生代表2名が、決意の言葉を述べました。続いて第二部は、思い出のスライドや2年生全員による合唱、教員による合唱と贈る言葉、そして卒業生による合唱構成詩の発表がありました。卒業生発表は3年間の想いのこもった感動的なものでした。ご出席いただきました保護者の皆様、ありがとうございました。



(卒業生発表の1コマ)

(校長式辞より) 抜粋

皆さんの旅立ちにあたりまして、3つのことを申し上げます。

一つは「これからも学び続けよう」ということです。どんな進路に進もうとも学びは一生続きます。

「なぜ人間は学ばなければならないのか」それをはっきりと教えてくれたのはパキスタンの少女マララさんです。マララさんは「1人の子ども、1人の教師、1冊の本、1本のペンでも世界を変えられる」とスピーチしました。また、差別や貧困を解決する力は教育である、と語っています。マララさんの母国だけの話ではありません。先進国と言われている国々においても子どもの貧困がユニセフから報告されています。わが国においても例外ではありません。社会の様々な問題を解決するために、知ることや学ぶことを大切にしてください。

二つめは「自分の幸せとともに他の人の幸せを考える人になってもらいたい」ということです。本学園を創立された鈴木修学先生は、「単なる学究ではなく、また、自己保身栄達のみには汲々たる気風ではなく、人類愛の精神に燃えて立ち上がる学風を満ち溢れさせたい」と建学の精神に記されました。その思いを受けて、当時、大学を挙げて伊勢湾台風の被災者救援活動に取り組みました。その精神は現在も確実に引き継がれ、東日本大震災への支援活動は附属高校生も加わり、ボランティア活動や和太鼓部による激励演奏など様々な形でとりくまれています。

詩人の吉野 弘さんは、「命は」という詩の中で次のように書いています。

「命は自分自身だけでは完結できないようにつくられているらしい

花もめしべとおしべが揃っているだけでは不十分で

虫や風が訪れてめしべとおしべを仲立ちする

命はすべてその中に欠如を抱き それを他者から満たしてもらおうのだ・・・」

人も生き物も自分だけでは不完全で、他者の助けを借りて、自分の欠如を他者から埋めてもらいながら生きている。自分が他人のために尽くすということは、相手を生かすことであり、自分もまた他の人から生かされるということだと思います。これからの生き方の参考にしてください。

三つめは「平和のバトンを受け継いでほしい」ということです。今、戦争体験を次の世代にどう引き継ぐかが世界各地で課題となっています。日本でも昨今、ひめゆりやナガサキの語り部の方たちがお亡くなりになり、戦争の悲惨さや被ばく体験が風化しつつあるのではという心配がされています。皆さんは修学旅行で沖縄を訪問し、沖縄戦を体験した方のお話を聞くなどして戦争の悲惨さを学んできました。皆さんには、平和についてさらに学び、平和のバトンを受け継いでもらいたいと思います。



卒業生の言葉

- 「周りの人を幸せにできる人間になりたい」入学式の日そう決意してから、3年の月日が過ぎようとしています。この3年間、私は多くの人々に支えられてきました。楽しい時には一緒に笑い合い、悩んでいる時には励ましてくれた友人たち。いつも優しく接してくれた先生方。会うと元気をもらえた先輩方や後輩の皆さん、周りの人々の支えがあったからこそ、私は充実した3年間を送ることができました。ありがとうございました。

付属高校では多くのことを学び、経験しました。陸上部では苦しいことを共に乗り越え、大きな喜びを分かち合い、仲間がいるということは本当に大切だということを知りました。

国際協力部では国内にとどまらない広い視野を持つことが大切であり、私は発展途上国での過酷な児童労働の現実を知りました。母子生活支援施設でのボランティアでは、それぞれの事情があっても笑顔で暮らしている子どもたちの姿に元気をもらいました。部活動やボランティアなどでの経験を通して、将来は日本だけでなく世界中の子どもたちが笑顔になるために協力したいと思うようになりました。

私は日本福祉大学子ども発達学部に進みます。この付属高校で得たことをさらに専門的に追究していく場に身をおくこととなります。真実を見つめ、慈愛の心で人と接し、献身的に活動していくことを誓い、卒業の言葉とします。(Kさん)

- 3年前、私たちは様々な思いや目標を持って、この日本福祉大学付属高校に入学しました。子どものころからけがの絶えなかった私は、理学療法士の方々にとってもお世話になりました。お世話になるにつれて、私もけがをした人を助けたいと思うようになり、理学療法士になるという目標ができました。

目標の理学療法士になるためには国家資格を取得しなければなりません。そのために日本福祉大学の健康科学部を選び、進学しようと決めました。進学するためには何をすればいいかを考えた時に思い浮かんだのは、当たり前のことですが勉強と部活を一生懸命やるということでした。勉強は毎日の授業を大切に受け、成績をバランス良く伸ばそうと心がけて勉強に取り組みました。

部活動ではバスケットボール部に所属しました。とはいえ私は全くの素人でした。けれどもとにかく上手になりたくて先輩を目標にし、試合などにも出場できるように頑張りました。

私が頑張れた理由は仲間の存在があります。厳しい練習の中で先輩・同級生・後輩たちに支えられてきました。おかげでバスケ自体が好きになれたし、忍耐力もついたと思います。私にとって文武両道を達成することが、大学に合格するための一歩だったんだと思います。

次なる私の目標は「理学療法士」になることです。大学に入学した後も文武両道の精神を忘れず、同じ目標を持つ仲間を大切に、共に努力し、国家試験合格を目指します。

私たちはこの日本福祉大学付属高校で、目標を持つこと、努力を続けること、仲間を大切に、ともに挑戦していくことの大切さを学びました。これから進んでいくそれぞれの道で、学んだことを大切に、成長したいと思います。3年間ありがとうございました。(Y君)